

現代の「シンデレラ」たち

—「フェアリー・テール」の変容—

06L044 岡崎 真弓

はじめに

人々は『シンデレラ』についてどのようなイメージを抱くだろうか。一つの「フェアリー・テール」に過ぎないかもしれないが「シンデレラ」は、「白雪姫」や「赤ずきん」などと並び現在まで世界中の子どもたちに愛されている物語である。そもそも私がこの物語を取り上げたのは、ゼミの中でこれらの「フェアリー・テール」とそのバリエーション作品について比較する機会があったからである。「フェアリー・テール」は「おとぎ話」とも呼ばれ、魔法や人間以外の生物の存在が強く印象に残る。「シンデレラ」についても、ガラスの靴を履き、かぼちゃの馬車に乗って舞踏会へ行くなどという非現実的なアイテムや行動が目につく。しかし、現代の読者が触れる「シンデレラ」の要素の多くはシャルル・ペローによって作りあげられたものである。歴史を辿っていけば、さらに多くの「シンデレラ」とその誕生の背景を知ることができる。

「フェアリー・テール」とは一般的に、魔法の国などを中心として繰り広げられる不思議な物語で、民間伝承をルーツとし、元々口承文芸であったものが地域や言語によって、また時代の変化に伴い。書き言葉として多く残されてきたものである。これらは、民族学者が「不思議な話」と呼んでいる短い聞き語りの類から生まれた。原形である「不思議な話」と、現存する「フェアリー・テール」は、遙か昔から、世代から世代へと口で伝えられ、その過程で絶えず変化していったため「オリジナル」の作品を再現することは難しい。最初の「ファンタジー」の形式とも考えられ、様々な国で翻訳され、主に子どものための文学へと変容し始めた。そして19世紀に入る頃には、それらの物語は西洋文化に普及していったのである。（『ファンタジー百科事典』30）一つ一つのバリエーション作品は、個々の作家によって書かれたもので、特に「シンデレラ」は現在でもそうした作品が量産される「フェアリー・テール」の一つである。

「フェアリー・テール」そのものに関しては昨今ブームと言える波はなく、むしろ廃れ始めているのではないと思われる。実際、多くの「フェアリー・テール」が偏見に満ちている、内容が暗すぎるなどという理由で子どもに読み聞かせるのを避ける親が増えているという。保護者の4分の1が、「シンデレラ」などの「フェアリー・テール」より、エリック・カール作の人気絵本『はらぺこあおむし』を好むらしい。「フェアリー・テール」の方が、より道徳的メッセージが強く、教訓的であるとは認めているものの、寝る前に子供に読み聞かせる話としては不適當であると考えている親が少なくないという。⁽¹⁾ 近年、「フェアリー・テール」は子どもよりも大人の需要が目立っているように感じられる。アニメや映画などで、物語の映像化が進むにつれ「フェアリー・テール」を文章として読む機会は少なくなってきた。しかしながら物語としては様々な形をとって、子どもだけではなく大人たちも依然として触れる機会が多い。

元々人間は物語が好きで、それはおそらく人間が言葉を得たときから存在していたものであると言われる。古くは神話、伝説、そして昔話へとその系譜は引き継がれてきた。それらの物語を自分たちの物語とし、他人と同じ物語を共有することで、同時に同じ価値観やアイデンティティを持つことができたと言えるだろう。⁽²⁾ しかしその物語によるアイデンティティの形成は社会の変化によって、以前よりも重要ではなくなっているように感じてならない。しかしながら、「シンデレラ」については、依然として女性たちのアイデンティティの問題に深く関わっているように思われる。

ここでは、グリムとペローの「シンデレラ」を使って、物語が生まれた時代背景や、基本的な筋立て、物

語の中で使われている要素やアイテムを概観し、現代の「シンデレラ」のバリエーション作品と比較していく。私は比較対象として、バリエーションである、映画『エバー・アフター』(EVER AFTER 1998)と『シンデレラ・ストーリー』(A Cinderella Story 2004)を挙げ、「シンデレラ」の以下の要素について比較していく。

- a. ヒロインの不遇な状態(頼りになる身内の不在)
- b. サポーターの存在
- c. 王子の花嫁探し
- d. ヒロインの変身と時間の制限
- e. ヒロインのアイデンティティの確認
- f. エンディング

現代においては、「シンデレラ」役の人物造形は異なり、物語は現代社会を反映して展開している。この物語を通して、女性の役割や価値観がどう変わったのか、またその歴史的、社会的背景を踏まえ、「シンデレラ」によって、女性たちがどのようなアイデンティティを追求しているのかについても考察していく。そしてこれらの元となる「フェアリー・テール」とバリエーション作品との比較・考察を通して、廃れ始めていると思われる「フェアリー・テール」(ここでは「シンデレラ」)がどのように現代社会にも影響を残しているかについて考えていく。

第1章 「フェアリー・テール」としてのシンデレラ

この論文で私が扱う「シンデレラ」は世界中に700種類以上いるようだ。世界的に知られているであろうと思われるのはシャルル・ペロー(Charles Perrault 1628-1703)による『サンドリヨン』(Cendrillon)とグリム兄弟(Brothers Grimm 兄1785-1863 弟1786-1859)による『灰かぶり姫』である。ここでは「フェアリー・テール」としての「シンデレラ」について、ペローとグリムの編纂したものについて考察し、「シンデレラ」物語の要素について調べてみる。

世界中には「シンデレラ」のバリエーションと思われる物語が多く存在する。現在知られている中で最も古い記録の一つに、ギリシャの歴史家が紀元前に記録したロードピスの物語がある。それは以下のような内容である。

エジプトのお屋敷に、美しい女奴隷ロードピスが住んでいた。主人は優しい人だったが多くの召使いに目が届かず、肌が白く外国人のロードピスは周りの女召使いからよくいじめられていた。ある時ロードピスが上手に踊るのを見た主人はロードピスに美しい薔薇の飾りのついたサンダルをプレゼントした。すると他の女召使いたちは、ロードピスに嫉妬し、一層彼女に酷く当たるのだった。

その後エジプトのファラオが民衆を首都に招き大きなお祭りを催した。召使いたちはそのお祭りに出掛けて行ったが、ロードピスはそのお祭りに行けないように沢山の仕事を言いつけられた。仕方なく言いつけ通りオルモク川で洗濯をしていると、薔薇のサンダルを誤って濡らしてしまう。そこでそれを岩の上で乾かしていると隼が持って行ってしまい、それをメンフィスにいるファラオの足元に落としていった。その隼をホルス神の使いと考えたファラオは、国中からそのサンダルに合う足の娘を探し、見つかったら結婚すると宣言した。やがて、サンダルの持ち主を探すファラオの船がロードピスの住むお屋敷にやってくる。ロードピスは始めは身を隠すが、サンダルを試させるとぴったりと合った。またロードピスが残っていた失

われたサンダルの片方も見つかり、王は宣言通りロードピスと結婚した。⁽³⁾

ここでは、すでに「シンデレラ」に当たる女性の不遇な状態、また彼女のたぐいまれな美貌、そして地位の高いものから見初められるという物語の筋が表れている。そして彼女を確認するために「靴」が重要な役割を示している。

1. シャルル・ペロー (Charles Perrault) の『サンドリヨン』

シャルル・ペロー (1628～1703) はパリ生まれのフランスの詩人・童話作家である。ルイ14世の時代に、父の跡を継いで弁護士として活動しつつ、一方ではアカデミー・フランセーズの会員として活躍する。詩人としても名を成し、各地に伝わる民話を収集してまとめた「童話集」で最もよく知られる。「長靴をはいた猫」、「赤ずきん」、「青ひげ」、「眠れる森の美女」、「シンデレラ」などを集めた『ペローのフェアリー・テール集』は、後のイギリスの「マザーグース」や、ドイツのグリム兄弟による民話収集の先駆けとなった。⁽⁴⁾

ここではペローの『サンドリヨン』(“Cendrillon”)を取り上げ、後に挙げるグリム兄弟の作品との相違点を挙げる。原題は “Cendrillon ou La Petite Pantoufle de Verre” である。

- a. 不遇な状態：意地悪な名付け親。
- b. サポーター：かぼちゃの馬車、ドレス、ガラスの靴を用意する魔法使いの登場。
- c. 花嫁探し：城で舞踏会が開かれる。
- d. ヒロインの変身と時間の制限：帰宅時間は深夜12時まで。
- e. ヒロインのアイデンティティの確認：王子がガラスの靴に合う娘を探し出す。
- f. エンディング：義理の姉たちはシンデレラの優しい計らいでお城に一緒に住むことになる。

グリムより早く編集されたペローのサンドリヨンでは継母や姉たちによるヒロインへの虐めが描かれていても、後には彼女が王女になるといったサクセスストーリーとしての要素が強く印象に残り、重苦しい印象はなく楽しく華やかな話にまとまっていると思われる。ペローの原典には最後に二つの教訓が掲げられている。一つは美しい心は万能であるということ。もう一つは何事にも後見人が必要であるということ。多くの絵本で、何故ペローのシンデレラ物語が使われているのかを考えてみると、絵本は幼児を対象としたものが多く、年齢が低いということもあり、分かりやすい言葉での表現、そして読者に対して常に優しい心を忘れずに、という訴えが含まれていることが大きな理由であろう。

2. グリム兄弟 (Brothers Grimm) とその時代

グリム兄弟は19世紀にドイツで活躍した言語学者・文献学者・民話収集家・文学者の兄弟で、日本では、『グリム童話』の編纂者として有名である。⁽⁵⁾ グリム兄弟の生存中、ドイツは小国家が並立した連合体であった。その後、一大帝国となったドイツだが、歴代皇帝がイタリアに勢力を張ろうとしてドイツ本土をおろそかにしたため、国内の不統一を招く。このためドイツ本土は大小諸侯の連合体と化し、1618年には30年戦争が起きた。戦争は終結したものの、神聖ローマ帝国は分裂、戦乱によってドイツは打撃を受け、経済的に立ち遅れた。300以上の小さな国家が群立した状態はグリム兄弟の時代まで続き、強国、プロイセンが誕生した後も内戦は絶えなかった。1789年のフランス革命は後に独裁者ナポレオンを生む。グリム兄弟が20歳の1806年にはドイツの諸侯国は、ナポレオンの傘下に組み入れられ、ドイツ全土が占領される屈辱的な事態となった。グリム兄弟が生活していたヘッセン国の首都カッセルもフランス軍に占領され、フランス語が公用語になるなど、厳しい状況だった。

ドイツが復興をめざす18世紀後半から19世紀前半は、ドイツ文化発展の絶頂期だった。文学ではゲーテ、シラー、哲学ではカント、フィヒテ、音楽ではモーツァルトからベートーベンといった後世に影響を与えた巨匠を輩出した。ドイツの知識人の多くは、この復興期を迎えるまで、ドイツ文化は他の西欧諸国に比べて大幅に遅れているという劣等感を抱いていた。対フランスの敗戦に際し、心ある愛国者たちは、群小国家に分裂していることの問題点に気づく。一方で、ナポレオンへの抵抗の意味も含めて民話や民謡など民族意識を高める書物の編纂が急増していった。グリム兄弟も「昔話のなかにあるドイツ民族の心の息吹を広めることによって、ナポレオン戦争後のフランスの植民地的状況に追い込まれて、士気を喪失しているドイツの人々に、民族としての誇りを取り戻させたい」という思いで童話集の出版を決意した。また、当時のグリム兄弟は収入が安定せず、生活は食事を切り詰めるなど困難を極めた状態だったので、当時ブームになりつつあった童話集の出版で、印税を稼ごうと考えたとも言われている。⁽⁶⁾

3. グリム兄弟 (Brothers Grimm) の『灰かぶり姫』

ここでは、グリム兄弟の『灰かぶり姫』についての説明をし、そして前述したペローの作品との相違点について考える。

『灰かぶり姫』（“Aschenputtel” KHM21）

- a. 不遇な状態：意地悪な継母。
- b. サポーター：魔法使いの登場はない。代わりに白鳩や多くの鳥たちが主人公を助ける。ドレスと靴を用意してくれるのは、母親の墓のそばに生えたハシバミの木に集まる白い小鳥。
- c. 王子の花嫁探し：3日間続くお妃決めのための宴が催される。
- d. ヒロインの変身と時間の制限：帰宅時間は夕方頃。
- e. ヒロインのアイデンティティの確認：靴はガラスではなく、一晩目は銀、二晩目は金の靴。王子がシンデレラを探す際、義理の姉たちは自分たちの足を靴に合わせる為にナイフで足を切り落とす。血が滲んだ足元から、偽者であることが知られてしまう。
- f. エンディング：シンデレラの結婚式で姉2人が両脇に並ぶが、白鳩が復讐として姉たちの目を潰す。

シンデレラの結婚式で幕は閉じるが、この周囲には「ハッピー・エンド」と言うにはほど遠い血なまぐさい様子が描かれており、ペローの作品よりも残酷なものとなっている。グリムの残した作品には様々な推論がなされているが、高橋吉文によると義姉たちの「足」の切断も物語には欠かせない一つの要素となっているようだ。

4. 「フェアリー・テール」に見られる「シンデレラ」の要素

以上、代表的な「シンデレラ」物語から、以下のような要素が「シンデレラ」には共通していることがわかる。

- a. ヒロインの不遇な状態：頼りになる身内の不在。使用人の身分。
- b. サポーター：不遇なヒロインを花嫁探しの場へ導く。
- c. 王子の花嫁探し：高い地位にいる男性がパートナーを探す。
- d. ヒロインの変身と時間の制限：ヒロインは本来の自分の立場を隠して花嫁探しの場へと導かれ、王子と出会う。しかし時間の制限があり、別れなければならない。

- e. ヒロインのアイデンティティの確認：ヒロインは自分が誰であることを示す手がかりを王子に残していく。
- f. エンディング：ヒロインはその王子と結ばれ、ハッピー・エンド。

元になっている「フェアリー・テール」の「シンデレラ」（ここではペローの『サンドリヨン』）や、後に出てくるそのパリエーション作品共に見られるパターンだが、気になるのは何故深夜12時になったらシンデレラの魔法は解けるのかという点である。「時間」の制限は、いずれの作品でもポイントとなっている。それは、時間による束縛という概念を映し出していると考えた。19世紀に遡るとグリム兄弟が活躍していた頃は産業革命の時代でもあり、多くの大人や子どもが働かされていた。そこで人々にとって自由な時間と労働の時間の区切りができたという背景を反映して、読者に時間の大切さやその時間をどのように使うかは自分次第であるということも伝えているのではないだろうか。また、香山瑛子によると、18、19世紀にはびこっていた児童虐待の実態も反映されているといった説もある。⁽⁷⁾

この時間の区切りは、シンデレラのアイデンティティの問題に深くかかわっている。舞踏会での時間は、彼女が実際に置かれている立場から解放され、より理想的な自分になれる時間である。しかしながら、その時間は限られており、また差別され、偏見の目で見られ、苦しい労働を強いられる立場にもどらなくてはならない。しかし、この二つのアイデンティティを一つにつなぐアイテムが必ず残されている。グリムとペローの「フェアリー・テール」ではガラスの靴である。これが手掛かりとなり、この二人の違った女性は一人の女性としてのアイデンティティが確認される。これらの要素は、次に見るパリエーション作品でも、形を変えて現れる。

第2章 現代のシンデレラたち

1. 「シンデレラ・ストーリー」とは ー現代にも残る理由ー

「シンデレラ」の話を元に、惨めな境遇から、ちょっとしたことがきっかけで成功をつかんだ人（特に女性）を「シンデレラ」と呼び、彼女たちの物語を「シンデレラ・ストーリー」と呼ぶことが多い。現代でも、こうした表現はよく使われる。現代の場合は、もちろん魔法の力ではなく、自分の才能によって魔法のように成功を手に入れるパターンが多い。また、フェアリー・テールの「シンデレラ」のように、継母に虐められるといった要素は無くとも、成功に至るまでの「苦労話」などがドラマチックに語られる。貧しさや身寄りの無さによる苦労、成功を得るまでの障害が大きいほど最終的に幸福をつかんだときに得られるカタルシスが大きくなるからである。⁽⁸⁾

現代の「シンデレラ」を語る上で、よく使われる表現に「シンデレラ・コンプレックス」という言葉がある。これは、アメリカの作家、批評家のコレット・ダウリングが問題提起をしたものである。若い女性たちの中に見られる傾向で、いつか王子様が救ってくれるという幻想に取りつかれ、シンデレラのように理想を追い求めるも、自分で努力せずに自由と自立を捨ててしまう独立と依存の二重性を持つ現象を指す。（ダウリング 32）「シンデレラ・コンプレックス」の背景には家父長制的社会の理想がある。アニメーションの『シンデレラ』（1950）を作ったウォルト・ディズニーは典型的な家父長制的家庭に育ったらしいが、こうした影響は彼の作品にも見られるであろう。ディズニーのアニメーションでは、『シンデレラ』だけでなく、『白雪姫』においても、元となった作品には存在した残酷な部分は一切削除され、男性の力の雄々しさを「王子」の姿で称え、従順さが強調された優しく素直な若い娘が登場し、家庭に入ることをすすめられ、最終的には家父長制を支持する物語に仕上げられている。

現代の「シンデレラ」たちには、読者や観衆の「リアリティ」が反映されている。また、「魔法」ではな

く、女性の自立・独立心が強調され、単に結婚によるハッピー・エンドではなく、王子との「恋」へのプロセスが詳細に描かれる。また「王子」の人物像も現実味を帯びたものとなっている。次に、20世紀末から21世紀に公開された映画版、「シンデレラ・ストーリー」を挙げ、現代、どのようにこの物語に変容しているかを考察する。時代設定は異なっているが、現代の読者に通じるような現実性を持った世界に、新しいシンデレラたちは暮らしている。そこには彼女たちを助ける魔法の要素は一切なく、多くの観客の共感を呼ぶような人物造形を持った、「リアリズム」の作品となっている。

2.『エバー・アフター』(1998年 アメリカ、アンディ・テナント監督)

原作はグリム兄弟の「シンデレラ」をモチーフにしているが、「フェアリー・テール」のシンデレラとは良い意味で全く違う物語となっている。意地悪な継母やガラスの靴や王子は登場するが、カボチャの馬車や魔法を操る妖精といった空想の産物は『エバー・アフター』のダニエルとは無縁の存在だ。時代は16世紀のフランスを舞台にしている。継母や血のつながらない姉たちと暮らすお転婆だけれどチャーミング、美しく才気あふれる魅力をもつ娘ダニエルが主人公である。実父の急死の後、自らの力で運命を切り開き、王子ヘンリーと結ばれるまでを描いている。ドリュエ・バリモアが勝ち気で颯爽とした新しいタイプのシンデレラを演じる。

物語のあらすじは以下の通りである。ダニエルという少女が、優しい父オーギュストと田舎の屋敷で暮らしていた。しかし、父が再婚したロドミラ男爵夫人(アンジェリカ・ヒューストン)が二人の娘を連れてやってくる。お高くとまった3人とダニエルは水と油。しかも、翌朝旅に出ようとした父が急死してしまう。10年後、ダニエルは灰まみれになってメイドとしてこき使われ、ロドミラ母子の贅沢三昧で家計は逼迫していた。ある日、畑で働いていたダニエルは、父の馬を盗もうとした若者の顔にリンゴを投げつけて落馬させる。ところがそれはフランスの王子ヘンリー(ダグレイ・スコット)だった。彼はスペイン王女との政略結婚に反発して城を抜け出てきたのだ。王子は快活なダニエルに興味を抱き、口止め料のお金を渡して馬に乗り立ち去る。ダニエルは王子からもらった金で、ロドミラが税金の代わりに売った使用人を買戻そうとしていた。貴族を装ったドレス姿で奴隷商人と交渉していると、通りがかった王子の一声で使用人は解放される。あの時のメイドだと気づかぬ王子は、トマス・モアの『ユートピア』を引用するダニエルと楽しく語り、彼女の名前を聞き出そうとする。ダニエルはとっさに伯爵夫人であった母の名である「ニコール」を名乗ってしまう。

ダニエルが貴族の娘だと思い込んだ王子は、政略結婚を目論む王に逆らって舞踏会で彼女を妃に迎え入れようとする。しかしそれを知ったロドミラは自分の娘を玉の輿に乗せようとあの手この手と策を練る。その上、ダニエルが母からもらった婚礼衣装とガラスの靴まで奪おうとする。一方、「ニコール」を探していた王子は、湖で泳いでいたダニエルに再会し、話せば話すほどダニエルの虜になり、彼女の自由な思想に感化されていく。僧院の図書室で王子とデートしたダニエルは、父から最後にもらった本が『ユートピア』だったことをうち明けた。王子はダニエルの向学心に感銘を受ける。帰宅すると、ダニエルは、自分の母の婚礼衣装を着ている義姉妹マルガリートを見るや、彼女にパンチを食らわし、怒った継母から大切な『ユートピア』を暖炉に投げ入れられ、背中にはムチの痛みが深く刻まれた。

王子は翌日の舞踏会で「ニコール」という名を発表するつもりだった。ダニエルは自分の素性を王子に告白しようとするが機会を逸してしまう。王子の意中の女性「ニコール」がダニエルだと気づいたロドミラは、怒りまくってダニエルを地下室に監禁した。そして、「ニコール」はベルギー人の婚約者のもとへ旅立ったと王子に報告する。王子は悲嘆に暮れ、息子の心を思いやる王が政略結婚を目的とした婚約発表を中止しようと申し出るが、受け入れようとはしなかった。いよいよ花嫁発表のとき、壇上に立った王子は、

会場の入り口にダニエルが来ているのに気づき、喜んで彼女の手を取った。しかし、ダニエルが告白しようとした時、ロドリガが大声でダニエルがメイドであることを告発する。またも騙されたことに傷ついた王子は、ダニエルの嘘を許すことができなかった。ダニエルはまた以前の生活に戻った。それどころか、厄介払いに裕福な商人ル・ピューのもとに売られてしまう。王子は最初の予定通りスペイン王女と結婚することになった。しかし、婚礼の式場で泣きじゃくる王女を見て式を中止する。そして、自分が本当に愛しているのがダニエルだと改めて気づく。ダニエルがル・ピューに売られたと聞いた王子は、あわてて彼の屋敷に駆けつけた。そのころ、足かせをはめられたダニエルは、隙をみて剣をル・ピューの喉元に突きつけ、脱出に成功する。屋敷の前で再会する二人。王子は、身分を聞いて彼女を裏切ったことを心から謝罪する。そして、彼女が舞踏会の会場に落としていったガラスの靴を履かせてやるのだった。「これが本当のシンデレラのお話」と陛下と呼ばれる貴婦人が曾曾祖母のロマンスを語るという形式をとっている。

この映画は、舞台をフランス革命以前（1789－99）の16世紀のフランスに移し替えた物語で、身分差についての問題提起がところどころ行われている。ヒロインのダニエルは決して可哀想な犠牲者でも、いつか王子が自分を救ってくれるのを黙って待つ受け身の女の子でもない。勇気をもって自分を虐げる継母とその娘たちに立ち向かう。亡き父の影響で読書好きで、正義感と進んだ社会観をもち、他人への思いやりを忘れない女性として描かれる。美しさだけでなく、知性と独立心で王子の生き方を変え、時には驚異的な機知とパワーを以って愛する彼の窮地を救いさえる。時代は16世紀のフランスだが、ここで描かれる女性像は現代の女性たちの共感を呼ぶことであろう。全てに現代的なセンスやウィットが盛り込まれているロマンティックなラブストーリーである。おもしろいのは、かのレオナルド・ダ・ヴィンチなど歴史上の人物が登場したり、魔法使いが出てこなかったりする分、現実味があるように思われる。ダニエルの生き生きとした個性、颯爽とした存在感が、今を生きる女性たちにロマンティックな夢とポジティブな人生観をもたらしてくれる。

3. 『シンデレラ・ストーリー』（2004年、アメリカ、マーク・ロスマン監督）

夢と笑いにあふれるハートウォーミングな現代版シンデレラと言える学園ロマンスで、ペローの「シンデレラ」の筋立てが使われている。歌手であるヒラリー・ダフが主人公サムをキュートに演じる。サムは風変わりなロサンゼルス高校に通う高校2年生の女の子。幼い頃、大好きだった父に先立たれ、父の財産を受け継いだ継母フィオナ（ジェニファー・クーリッジ）と義理の姉たちにこき使われて暮らしていた。学校にも友人は数える程しかなく、サムは学校のチャット上で知り合った男性に恋愛感情を抱くようになる。しかし、その相手は学校の人気者オースティン（チャド・マイケル・マーレイ）であると判明。学校のダンスパーティーで会うことを約束するが仮面を付けていたため正体を知られず会話をする。継母に知られる前に帰宅しなければならなかったサムは現実に戻され午前0時前にその場に携帯電話を残して姿を消す。

「フェアリー・テール」との類似点は、サムをこき使う継母や姉たちが存在すること、また舞踏会ではないが「王子」役の男性と出会う場となるダンスパーティーが開催されること、ヒロインは実際の自分を隠して「王子」に出会うが、後に彼女のアイデンティティを確認するアイテムが残されるところ、そして継母に知られる前に午前0時には帰宅しなければならない点である。しかし、ここでは、彼女を確認するアイテムはガラスの靴から、現代では誰もが持つようになった携帯電話へと変容している。これはまさに時代の変化を表す重要なアイテムである。

「時間」の制限はこの作品でもポイントとなっている。この作品では、携帯電話のアラームが夢のような時間の終わりを告げる。ダンスパーティーの会場を離れ、二人で踊る場面で、12時前にセットしておいた

携帯のアラームが鳴ったところで以下のような二人の会話がある。

サム：「遅れちゃう！」

オースティン：「何に!？」

サム：「現実に関…」

2人の前に、時間という無情な壁が立ちほだかり、いつまでも夢のような時間は続かないことを感じさせる場面である。インターネットや携帯電話の登場は、時代の流れを感じさせる。二人のやりとりは手紙でもないし、王子が足を運んで一人一人シンデレラを探すような手間もない。「インスタント・メッセージ」時代のシンデレラの恋をコミカルに描いている。

この映画はとにかく現代版「シンデレラ」と言える。昔は女性の教育目標として「良妻賢母」のような生き方や、家父長制の中での女性の役割への順応が挙げられるだろうが、今やそんな時代ではない。女性の社会進出、恋愛観の変容、通信手段の発展がこの映画には反映されている。ストレスフルな社会を生きる現代人にとって、現実の人間関係に疲れた時に自分の理想像を作り上げることは難しいことではない。この映画であれば、チャット上で知らない異性とのやりとりを通して、「ダイナー・ガール」と呼ばれ召使いのように日頃こき使われているサムは、日常の苦勞や人間関係を離れて、自分の理想的な将来について語ることができる。

多くの女の子が憧れる「シンデレラ」的人生、そして「シンデレラ」といえばガラスの靴、王子との結婚で玉の輿などと想像するだろうが現実はそんなに甘くはない。この映画の中には魔法使いなんてものはいないが、きっかけを与えてくれる存在、また精神的な支えとなる友人たちは登場する。自分が受け身であっても王子が現れてくれる「フェアリー・テール」の「シンデレラ」とは異なり、自分が幸せになるためには自分が変わらなくては行けないというメッセージがこめられている。「王子」との出会いやシチュエーションは言わば「いまどき」のアメリカの高校生の生活を反映しており、学園ロマンスに仕上げてあるので、現代の私たちのような学生や若者にとっては感情移入しやすく楽しい作品になっている。自分の進路や家庭環境に挟まれ迷走する主人公を見て、視聴者は自分や身近な問題と照らし合わせて、共感を覚えるであろう。

また、この作品の「王子」は現代女性の理想像のようなものであるように感じる。冴えない「ダイナー・ガール」のサムにとって、自分のチャットの相手が学校一容姿も頭も良く人気者であるオースティンであるとわかればちょっとした優越感に浸ってもおかしくないだろう。オースティンの取り巻きは、学校でも一目置かれるグループとして描かれている。彼はアメリカの代表的なスポーツのアメリカン・フットボールで活躍し、ガールフレンドはチアリーダーで活躍している。目立たないサムとは生きる世界が違う、遠い存在として描かれている。

しかし、オースティンは女性を一方的に強力にリードする「王子」ではない。オースティンは、大学でもアメリカン・フットボールを続け活躍し、いずれは父の会社を継ぐことを期待されている。しかし、マッチョなアメリカ人男性ではなく、むしろ繊細で文学好きな面を持っている。映画の中でオースティンはアルフレッド・テニソンの詩を引用する。テニソンはヴィクトリア朝時代のイギリス詩人で美しい韻律を持ち、日本でも愛読されている。テニソンの詩は憂愁と官能、抒情と夢幻に彩られ、芸術と現実の二つの世界のあいだに揺れ動く詩人の姿勢を表している。まさに現実と理想の間を揺れ動くこの作品のヒロインとヒーローにふさわしい引用となっている。「シンデレラ」も変容しているが、「王子」の描かれ方もかなり変容している。かつての「フェアリー・テール」の王子については一切、彼の悩みや弱さについて触れられること

はない。しかし現代では、もはやシンデレラに当たる女性は受身ではなく、むしろ「王子」と一緒に悩み、そして未来を語ることのできる、対等なパートナーとして描かれている。

おわりに

「フェアリー・テール」の「シンデレラ」では、ヒロインはかつて、両親とともに幸せに暮らしていたわけだから、実母の病死、特に父の再婚後は、回復すべき目標として家庭の幸福がまずあるわけだ。その目標達成のためにヒロインが活用できる資本とは心優しさと美貌である。言い換えれば、シンデレラは自ら英雄になるのではなく、あくまでも王子の獲得（＝結婚）を目標としている。グリム兄弟の「シンデレラ」を取り上げ、物語の深層的欲望の方はあくまでも結婚と迫害者の処罰を目標にしていると指摘する批評家もいるが、基本的には「シンデレラ」自身は慎ましやかで、欲望に突き動かされることのない受動的な存在として描かれている。

現在でも「シンデレラ」のバリエーション作品は新たに作られ、そして消費されている。それらは時代や社会の変化に伴い、現代では女性を受動的な存在としてだけではなくむしろ能動的に描いている。「良妻賢母」、また家父長制における女性の役割を目標にするのではなく、女性の社会進出、恋愛観の変容、通信手段の発達を反映し、よりポジティブで活動的な「シンデレラ」たちが生まれている。また、出会いと結婚については、「フェアリー・テール」の場合、出会いである舞踏会のみが描かれているが、バリエーション作品では恋愛のプロセスや、互いを理解する過程を詳細に描いている。それが観客の共感を呼び、またリアルに感じ取れる。現実の人間関係、恋愛面で悩むことも多い現代人にとって、不遇な状況からハッピー・エンドをつかむシンデレラは依然として憧れの存在であり続けている。現代の「シンデレラ」たちは、理想や夢を抱きつつも、家庭環境その他の問題点、そして自分の理想の間で揺れ動き、もがきながらも、幸せをつかんでいく。『シンデレラ・ストーリー』のヒロイン、サムが心に繰り返す言葉。それは亡き父が残してくれたものだった。

“Never let the fear of striking out keep you from playing the game.”

「三振を恐れて試合から逃げ出すな」

幸せが訪れるのを待つのではなく、それをつかむために奮闘し、強く美しく成長する「シンデレラ」たちは、現代社会を生きる私たちを元気にしてくれる存在なのだ。

註

- (1) フェアリー・テールの読者層については、<http://urawa.cool.ne.jp/shisou/mweb/01/02-03.html> (2009/10/30 閲覧) を参考にした。
- (2) 物語の役割について http://www.lepetitprince.net/sub_shoshineuv/neuvdemand.html (2009/10/30 閲覧) を参考にした。
- (3) “The Egyptian Cinderella” (2009/10/30 閲覧) を参考にした。
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%AA%E3%83%A0%E5%85%84%E5%BC%9F>
- (4) ベローフェアリー・テール集は以下を参照 (2009/11/12 閲覧) <http://www.gutenberg21.co.jp/perrault.htm>

- (5) グリム兄弟については、香山瑛子、「グリムの世界」(2009/10/30 閲覧)を参考にした。
<http://www.osaka-c.ed.jp/matsubara/kadai/24ki/kadair05.htm>
- (6) 『グリムフェアリー・テール集1』解説参照。
- (7) 注(5)を参照。
- (8) 「シンデレラ・ストーリー」についてはウィキペディアも参照した。(2010/1/6 閲覧)
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%83%87%E3%83%AC%E3%83%A9%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%BC%E3%83%AA%E3%83%BC>

引用文献

ダウリング、コレット 『シンデレラ・コンプレックス』 三笠書房、1981年。
グリム兄弟編、金田鬼一訳『グリムフェアリー・テール集1』 岩波文庫、2008年。
高橋吉文『グリムフェアリー・テール 冥府への旅』 白水社、1996年。
ブリングル、デイヴィッド編、井辻朱美他、訳『ファンタジー百科事典』、2002年。

Cinderellas in the Real World: Transfiguration of the Fairy Tale

06L044 Mayumi Okazaki

〈Abstract〉

“Cinderella” is one of the most famous works in the fairy tales, and there are innumerable variations of the story. Ones of the most well-known “Cinderella” stories are Charles Perrault’s and Brothers Grimm’s, which have been read and re-made into other works, and loved by millions of people. First, we will see the basic plot and some essential elements of the “Cinderella” stories as follows:

- a. The heroine as an unfortunate young girl who lives with her cruel step mother and sisters. They make her their servant and abuse her every day.
- b. There are some supporters for the heroine.
- c. There is a man in a higher rank, who is looking for his wife. Every girl in the city is anxious to be the one. There is a ball where the man is supposed to find an illegible girl.
- d. The heroine must go home by the midnight.
- e. There is some items to identify the heroine.
- f. Happy ending

The plot and some elements are varied into other works such as novels, dramas, and films. Second, the comparison between the fairy tales of “Cinderella” and the modern works such as *Ever After* (1998) and *A Cinderella Story* (2004) will be attempted. For these modern “Cinderellas”, there is neither a witch nor any magic to help her. They are not the passive girls just waiting for a prince to come and make them happy. They are rather independent and always try to make any difference in their troubled lives. By the comparison, the transfiguration of “Cinderella” stories will be considered.

(卒業論文指導教員 杉村使乃)